



# かどや通信

第1号

発行日 平成25年3月  
発行 かどや保存会  
事務局 鳥羽市鳥羽4丁目3-24

速報！五月一日グラウンド・オープン！

## かどや保存会を立ち上げて

かどや保存会

会長 清水 久行

平成二十四年に「かどや保存会」を立ち上げ、五月十七日に設立総会をひらきました。

十世代にわたる歴史を持つ廣野家所有の家・蔵・土地・文物が鳥羽市に寄付されたことを発端に、鳥羽市教育委員会の青写真のもと、国の助成金や起債を活用した修復も、土蔵改修やトイシ建設を最後に、三期にわたる工事が三月末をもって完了し、五月にはいよいよ開館となりました。

地元では「かどや」として知られている大庄屋・廣野家住宅では今後、①建物の保存と譲られた文化歴史資料の研究②この建築物を中心に心地よい空気が

流れる交流の場づくり③文化的資料展示等による歴史の継承に留まらず、今を生きる我々の作品の発表の場として、新たな文化創造や発展の推進——につながる場所を目標に活動していきます。

運営は、かどや保存会が中心となっており、この活動を理解し支援していただく方が必要と考え、会員を募ったと

ころ、平成二十四年度の会員として約百二十名の皆様からご参同をいただくことができました。会員の皆様には改めて御礼申し上げます。

しかし、本格的な活動が始まる平成二十五年度には、より多くの方々に会員やボランティア・スタッフとして、ご参加いただきたいと思います。

おもてなし精神あふれる運営をするためには、「廣野邸の売りはスタッフです」と言える質の向上を目指し、訓練を重ねてまいります。かかわっていただく方々が、廣野邸だけでなく、この界隈の案内役を自任できるようにになり、「廣野邸があるので、地域が活性化した」と言われる姿を目指します。

今後は、メールやホームページでイベントのご案内・活動報告をはじめ様々な情報をお知らせできるようにいたしますが、まずは、広報誌「かどや通信」第一号をお届けいたします。

今後のご指導・ご鞭撻をよろしく願います。



# 内覧会で母屋お披露目

〜四日間で

約400人が来場〜

かどや保存会では、第二期工事である母屋修復の完成を祝い、旧廣野家住宅の内覧会を十一月十日&十一日と十二月一日&二日の四日間にわたって実施した。十一月は近隣の方々を対象で、二日間で約百九十名が訪れた。当家のランドマークとも言えるイチョウの木から収穫した銀杏と、かつての薬屋にちなんだ「恋



の妙薬」と名付けられた飴に加えて鳥羽市水道課から提供された「鳥羽の水」がおみやげとして配布された。

十二月の一般公開には市外からの訪問者も多く、二日間で約二百三十名が来場した。当日は、ぜんざいとお茶のふるまいがあり、築山のある庭や色づいた銀杏を眺めながら大庄屋時代を偲んでいただいた。

内覧会に向けては、藤之郷町内会の有志が掃除やふるまいサ



ービスにも協力していただき、おもてなしの心が伝わる内覧会となった。



## 廣野家の資料に触れて

### 保存活動の歩み

鳥羽市教育委員会

文化財専門員 野村 史隆

はじめて廣野家の資料に触れたのは平成十六年、九年前のことだった。

廣野家十代目にあたる道夫氏が屋敷を処分するということから、何とか残してほしいという声が上がった。その声を受けていろいろな方の努力と協力をいただき、庭を含む主家、内蔵、土蔵などの建物とその中に残された民俗資料一式が「鳥羽の文化に役立ててくれるのであれば」という所有者からの条件付きで鳥羽市に寄贈されたのが平成十六年四月二七日であった。

資料確認のため内蔵に入って驚いたのは、百年〜百五十年前からの生活用具や薬屋を営んでいた頃の製薬用具一式がそのまま、しかも最近まで使っていたかのようにすばらしい保存状態

で残されていたことであった。同時に、これらをいかに整理していったらよいかの頭をよぎったのを覚えている。整理し、どういった資料が何点あるのかを確認しないと、その価値およびそれらを活用した方向性がつかめないからであった。

それまでも廣野家には古い資料が多く残されているという事は言われてきた。事実三十年以上前の鳥羽市文化祭のおり、山本実氏の骨折りで数多くの廣野家の資料が紹介展示されたことがあった。返却されたそれらの資料を含め、九代目夫人であった重子さん（平成十四年没）が頑なに守ってきた生活用具、娯楽用具、写真・文書資料は、廣野家の歴史を証明する全てが残っていた。

資料を整理していく中で、薬屋を営んでいたことは古写真の軒下に薬看板が掲げられていることから理解できたが、当時の看板が見当たらないのが気になっていた。それを内蔵の床下に

設けられた一坪程の部屋の砂止めに使われているのを発見した時、「これだー」と思った。これで薬剤、製薬用具、看板が揃い「薬屋廣野（かどや）」といった方向が見えたからである。

蛇の抜け殻の残る暗い床下に入り、板を外すたびに砂が崩れる音を聞きながらの作業は、今想像するだけでも自分ながら異様な光景であった気がする。



## かどや保存会のホームページ近日公開！

5月1日のグランド・オープンに向けて、工事中です。  
イベント情報や行事報告等を随時紹介していきますので、  
よろしくお願いたします。

ホームページ・アドレス <http://www.hironotei.jp>

# 帰ってきた長尾ベビーオルガン

## 記念コンサートは、六月八日!

長尾風琴  
製造所が三  
重・松阪・  
湊町にあつ  
たことから  
佐藤泰平氏

「伊勢国松阪湊町 楽器師 長尾芳蔵」氏が文部省音楽唱歌取り調べ所に提出した記録が、仙台市在住のオルガニストでありオルガン研究家の佐藤泰平先生の著書にあります。さらに、明治十九年十一月九日の新製オルガン発表広告には「外国製貴きは千金、低きは百圓を下らず」「余の新製するオルガンは代価金貳拾圓以上、百圓未満」とあります。

平成八年に伊勢市河崎の藤井ちよさんが六十一鍵の古いリードオルガンを浜松市の楽器博物館に寄贈しました。元は宇治山田高等女学校で使われていたものでした。

これが長尾芳蔵氏が制作したものであり、新聞記事となってオルガン研究家の佐藤泰平氏の手にとまりました。

の探索眼は三重県南部の学校や教会などオルガンと関わりが深いと思われる所への電話攻勢となりました。

鳥羽教会にかかつてきた電話に清水美小枝が出たことから近所の廣野重子さんにつながり、三十九鍵の長尾ベビーオルガンが廣野家の蔵から見つかりました。さらに数年を経て、松阪市の旧家・岩崎家から四十九鍵の三台目の長尾オルガンが見つけ出されました。

「鳥羽長尾オルガン」会報に寄せられた佐藤先生の記事には当時の伊勢新聞の記事と納税記録以外には、長尾氏がオルガン製造にとり組んだ動機や事業計画、製造台数の輸入記録、木材調達、製造所の写真などは分かっておりませんでした。どうか、明治期のロマンミステ

リーの解明にとり組まれてはいかがでしょうか。

さて、この長尾オルガンが、きわめて珍しいこともあり、修復には多くの市民の浄財が寄せられ、明治の音色が復活。平成十三年に「鳥羽長尾オルガン協会」が設立され、以後十回近くのコンサートが開かれ、今年も六月八日(土)に鳥羽商工会議所かもめホールで、このベビーオルガンによる文明開化の音と、

テノール歌手・畑儀文氏のコンサートが開かれます。

なにぶんにも製造後百二十数年が経っていますので、修理が難しく調律もまた悩ましい課題となっています。

この長尾ベビーオルガンは、長らく鳥羽教会で預かっていただいていしましたが、廣野邸の修復も成りましたので、今後は廣野邸を拠点に新しい活動を開始する予定です。

佐藤泰平氏が演奏するCDもあります。

廣野家の蔵から見出されてからの長尾ベビーオルガンは、小さな身体で大きな働きをしてきたと思います。

経済の大切さは勿論ですが、文化の果たす役割もそれに劣らず人生には大きいことを教えてくれる音色です。

ぜひ、長尾ベビーオルガンの音色に耳を傾けてみませんか。

かどや保存会

会長 清水 久行

